

座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

2022年3月13日（日） 九州大学附属中央図書館 4F きゅうとコモンズにて

主催：「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」

座談会コーディネーター： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

進行： 堀 優子 九州大学附属図書館eリソース課長

記録： 九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された2022年3月当時のものです。

(2022-12-27)

≪開会：趣旨説明・参加者紹介≫

堀：おはようございます。

本日は、お忙しい中、座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」に、ご参加いただきましてありがとうございます。本日、皆さまを九州大学にお迎えすることができて、大変感激しております。私、本日の全体の進行を務めさせていただきます、九州大学附属図書館の堀と申します。至らぬ点もあると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」は、ペシャワール会様のご協力の下始動して1年、中村哲医師メモリアルアーカイブ、中村哲著述アーカイブ、中村哲記念講座を中心に取り組みをまいりました。その中で、同じく中村先生のことを伝えていきたい、つないでいきたいという、母校の福岡高校・九州大学の生徒さん・学生さんたちのグループともつながりができました。中村先生と直接関わったことのない私たちが、中村先生のことを伝え、つないでいくために、共に活動をしてこられた方々、そして、関わってこられた方々、その方々と出会い、語り合い、中村先生のことを深く知り、さまざまな視点から分かち合いたい、そういう思いで、この場を設けさせていただきました。

短い時間ではありますが、たくさん語らって、多くのものを持ち帰っていただければと思います。よろしくお願いいたします。それでは、開会にあたりまして、本学の教育担当、副学長で、中村哲記念講座を担当しております、鏑木政彦先生より、ごあいさつ申し上げます。

鏑木：ただ今ご紹介いただきました、鏑木でございます。

本日は、座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。伊都キャンパス、福岡の西のほうでありますけれども、すぐに来られるという場所ではございませんが、こうして多くの方に来ていただきまして、本当にありがたく思っております。今、座談会の趣旨を堀さんにご紹介いただきましたけれども、いろんな立場、いろんな距離、いろんな関わり方を持って、中村哲先生のこのプロジェクトに、今後も関わっていきたい、何らかの形でこれを継承していきたい、そういう思いを持った方々が、この場に集まってくださいました。



高校生も、こうして来てくださったこと、とてもうれしく思っております。今日は、いろんな立場にある、そうした方々の話に耳を傾けて、そこからちょっと元気をもらって、これからどうしていけばいいのかを考えるヒントを持ち帰っていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。私のあいさつは、以上とさせていただきます。

堀　：それでは駆け足になりますが、私のほうから、本日お集まりいただいた方々を、簡単にご紹介をさせていただきます。お呼びしましたら、お立ちになって、皆さまにお顔を見せていただければと思います。拍手は、最後にまとめてで、お願いします。

まず、ペシャワール会と PMS 支援室から。村上優会長、PMS 支援室長藤田千代子さん。PMS 支援室から、山下隼人さん、靱井孝文さん。ペシャワール会理事で、多くの中村先生の著書を発行された、石風社の福元満治さん。ペシャワール会からオブザーバー参加として、事務局長の古川正敏さん、支援室の西岡和子さん。現地ワーカーの OB の小林晃さん。

中村先生の同級生で、ご親友の宮崎信義先生。宮崎先生には、会の中ほどに、学生時代の中村先生などについて、少しお話し頂くことにしております。

続きまして、メディアの立場から中村先生のことを伝えてこられた方々、日本電波ニュース社の谷津賢二さん。KBC九州朝日放送の白井賢一郎さん。朝日新聞社の佐々木亮さん。西日本新聞社の中原興平さん。日本電波ニュース社からは、オブザーバー参加として、上田未生さんにもお越しいたきました。

ペシャワール会事務局のすぐ横、春吉小学校のほうで、小学生に向けた授業をされている、武内厳太先生。母校福岡高校で伝える取り組みを始めた、福高生、「ペシャワール班」の皆さん。九州大学のほうで、哲縁会というのを立ち上げられました、九州大学の学生の皆さん。九州大学でこのプロジェクトに関わっております、九州大学の内藤敏也理事。鏑木政彦先生、當眞千賀子先生、久保智之先生、飯嶋秀治先生。本日は、このようなメンバーに集まっていただきました。

お一人、ご紹介を忘れておりました。九州大学で、国際発信というところでプロジェクトに関わってくださっている初見かおりさん。皆さまにお配りしました、英文のリーフレットですね、初見さんがご尽力くださって、ようやく完成をいたしました。

それから、紫色の名札を付けて周辺に立っております図書館のスタッフが、お世話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

《最近の現地活動についての報告：ペシャワール会村上優会長より》

堀　：座談会に先立ちまして、ペシャワール会の村上会長から、最近の現地活動の状況について、ご紹介を頂きたいと思っております。よろしくお願いいたします。

村上　：最近のといいますと、皆さんが一番関心があるのは、8月15日にタリバンが復活をしたという以降のことだろうと思います。8月15日までは、普通のとおり、PMSの活動は、中村先生亡き後も継続されていきました。ただ、15日、政変が起こったということで、いったんは活動を休止しましたけ

れども、医療は1週間後、農業は2週間後、用水路のほうは、全体としては準備は整っていたんですが、お金の問題がございまして、2カ月ほど後に活動は再開しております。それで3事業とも、ある意味では普通どおり、活動が、できているんです。

一番の問題点というのは、干ばつが、2010年当初から、非常にシビアな状態があって、なおシビアになって続いていたと。それから、2点目は、政変があった後に経済制裁が起こって、そして、お金を送ることができなくなったことです。もっぱら、われわれのほうは、事態を重視して、いろいろな所に働き掛けをしていましたけれども、お金のほうは、10月と12月に、相当のお金を送ることができました。これは、どうやってって聞かれたら、ちょっと、そんなに簡単にはいかないんですけれども、とにかくお金は入れることができました。

そのために、活動そのものは、食糧支援が、一番危機的な状態として表れた。この干ばつのことと経済封鎖で、非常に、生活が立ちゆかなくなっていく。それでなくても食糧がないところに、食糧が欲しい人すらも買うことができないという状態で、飢餓、それから餓死という問題があって、国民の半分以上に影響が出ていて。初めの報告では、800万人を超えて、ものすごいシビアな飢餓があるという報道が出ておりましたが。それに対する食糧支援も、この1月にはできるように準備をいたしまして、2月の初めからは展開に行ったと。そういう意味で、やれることはやっていこうということで、ナンガルハル州を中心にしてですけれども、活動は、向こうで活発に行われています。

一番よい点では、治安が、圧倒的によくなったということです。8月が起こった後、10月、11月ぐらいまでは、何かしら不穏な動きがあったんですけれども、12月ぐらいからは、特に治安がよくなりましたので、われわれ自身の活動は、しやすくなっていったというふうに思っております。ただ、国際世論のほうは、まだまだ厳しいものがある。なかなか、タリバン政権を介して何々をするっていうことは、ほぼできていない状態。アフガニスタン中央銀行の資金も凍結されたままですし、それから、世界銀行も、一応は、人道支援に関してはお金を拠出するってのがあったんですけれども、行政を握ってるタリバンからは、迂回してしかできないっていうことで、ある意味での混乱は、まだ続いているだろうと思います。

その中、中村先生がおっしゃるように、「水が善人・悪人を区別しないように」ということをモットーに、とにかく事業は、われわれは、いろいろな状況の変化にもかかわらず、現地の人々の目線で継続できているということを報告させていただきたいと思います。以上です。よろしいですか。

堀 : ありがとうございます。

それでは、3点だけ、連絡事項をお伝えいたします。本日、コロナ禍ではありますが、このように対面で開催できたこと、大変うれしく思っております。感染対策として、マスクの着用にご協力ください。また、途中、休憩を入れて、換気をいたしますので、ご了解ください。それから、2点目、本日の座談会、記録のために録音をさせていただきます。文字起こしをしまして、記録として保存をしますとともに、参加者の皆さまには共有したいと思います。そして、その中のエッセンスを、報告として、著述アーカイブから公開の予定でございます。その際には、皆さまに内容をご確認いたします。3点目、スタッフが、写真を撮らせていただきます。広報等に使用することがありますので、写真を外部に出示してほしくないという方がいらっしゃったら、スタッフまでお申し出ください。以上です。

それでは、いよいよ座談のほうに入っていきたいと思います。ここからは、當眞千賀子先生にバトンタッチいたします。

當眞：皆さん、おはようございます。

九州大学の當眞と申します。私の専門は発達心理学で、鏑木先生と一緒に副学長を務めながら、この会に関わらせていただいて、このご縁が頂けること、とてもありがたく思っています。

今日は、これだけの方々が集まってくださっていて、報道の方々にも入っていただいています。本来であれば、大々的に、撮影、取材、報道につなげていくに値する集まりだと思うんですけども、あえて今回は初回ということで、報道の方々にも報道という役割を、その荷を下ろしていただいて、一緒に同じ立場で語り合う場が一度は設けられると、急がば回れではないですが、今後の展開の仕方がかえて豊かになるのではないかなということ。本当に素晴らしい報道のかたがたに来ていただきながら、報道が入らないという会になります。その代わりに、記録を、九大のほうで、写真も撮らせていただきたいと思いますので、先ほどありましたように、気になる方、写り込みが、公開が困る方は、ぜひ遠慮なくおっしゃってください。

本日の趣旨は、何か一つの目標に向かって結論を出そうということではなく、中村先生ご自身と、または中村先生の仕事やペシャワール会の活動と、何らかの形で出会って、それが大事だと思っている方が、ここにこうして集ったことを大事にするということにしたいと思います。

大学の役割のひとつは、著述も含めたアーカイブ、リポジトリを蓄積し、その一つの集積の場になっていくということ。それから、先ほど紹介がありました、記念講座という形で、教育の一環として位置付けていくこと。そしてもう一つは、何らかの形で、こういうふうな、つながりのある人たちが出会って、お互いの活動に対してのいろんな気づき、学びを得る場を提供することではないかなと思っています。

ですので、今日は、特に何か目標を持ってというよりは、集ったこと、出会ったこと、気になっていること、語り合ってみたいことを、遠慮なく語り合う時間が生まれればよいなと思っています。

このリーフレットの中に、グループが書いてあるんですね。図書館スタッフが、工夫して、中村先生の活動にゆかりのある場所の名前をグループ名にしてあると思います。自分がどのグループかは、虫の絵が付いていると思いますけれども、それと対応しているようです。グループごとにお席を準備しておりますので、そこに分かれていただいて。まず最初の、どれぐらいでしたっけ、時間。1時間弱ですかね。

堀：まずは、11時30分までを座談とします。

當眞：(座談グループで)語り合っていただければと思います。お席は、後ろのほうに。

感染予防ということもあって、広がっていますけれども、どうぞ、お名前とグループ名を確認していただき、早速ですけれども、お席を移動していただき、語り合いの時間を楽しんでいただければと思います。

(了)